

古文 読解問題 「大和物語・「姨捨」」①

①信濃の国に更級といふ所に、男住みけり。若き時に親は死にければ、をばなむ親のごとくに、若くより添ひてあるに、この妻の心、憂きこと多くて、この姑の、老いかがまりてア るたるを、常に憎みつつ、男にも、このをばの御心のさがなく悪しきことを言ひ聞かせければ、昔のごとくにもあらず、②おろかなること多く、このをばのためになりゆきけり。このをば、いといったうイ老|いて、二重にてゐたり。これをなほ、この嫁どころせがりて、今まで死|なぬことと思ひて、よからぬことを言ひつつ、「もていまして、深き山に捨てたうびでよ。」とのみ責めければ、責められわびて、さしてむと思ひなりぬ。

月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ給へ。寺に尊き業するる、見せ奉らむ。」

と言ひければ、限りなく喜びて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるばると入りて、高き山の峰の、下り来べくもあらぬに、置きて逃げて来ぬ。「やや。」と^エ言|へど、答へもせで、逃げて家に来て思ひをるに、言ひ腹立てける折は、腹立ちてかくしつれど、年ごろ親のごと養ひつつあひ添ひにければ、いと悲しくオ|おぼえけり。この山の上より、月もいと限りなく明かく出でたる眺めて、^③夜ひとつ、寝も寝られず、悲しうおぼえければ、かく詠みたりける。

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

と詠みてなむ、また行きて迎へもて来にける。それよりのちなむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これがよしになむありける。

問一・次の「大和物語」の知識に関する問い合わせに答えなさい。

① 「大和物語」が成立した時代を答えなさい。

② 「大和物語」と同じ歌物語に含まれる作品を次の選択肢の中から全て選びなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ア 竹取物語 | イ 土佐日記 | ウ 伊勢物語 | エ 源氏物語 |
| オ 平中物語 | カ 保元物語 | キ 落窪物語 | ク 増鏡 |

問二・傍線部ア～オの動詞の活用の種類と活用形（○行○活用○形）を答えなさい。

問三・傍線部①「信濃の国」とは現在の何県にあたるか答えなさい。

問四・傍線部②「おろかなること多く、このをばのためになりゆきけり」とあるが、なぜそのような態度になつたのか答えなさい。

問五・傍線部③「夜ひとつ、寝も寝られず、悲しうおぼえければ、かく詠みたりける」を現代語訳しなさい。

読解問題「大和物語・姫捨」① 解答・解説

問一 ① 平安時代前期

② ウ(伊勢物語)、オ(平中物語)

： 和歌を中心に、和歌の詠まれた事情を語る物語を「歌物語」という。「伊勢物語」は、在原業平をモデルとした「男」の一代記をえがいた平安時代中期の歌物語。貴族社会や説話に関するエピソードが和歌と共に書かれている。「平中物語」は平安時代中期に書かれた歌物語。平中とよばれた平貞文を主人公とした、恋愛説話。アの「竹取物語」は作り物語、イの「土佐日記」は日記、エの「源氏物語」は作り物語、カの「保元物語」は軍記物語、キの「落窪物語」は作り物語、クの「増鏡」は歴史物語。

問二 ① ワ行上一段活用連用形 : 活用部分が「わ・ゐ・う・ゑ・を」の動詞はワ行になる（「植う」「飢う」など）。「ゐる」は滞在するという意味で、上一段活用になる。（上一段活用の語は暗記）ゐ・ゐ・ゐる・ゐる・ゐれ・ゐよと活用し、下の語が連用接続なため連用氣だと判断できる。

② ヤ行上二段活用連用形 : 終止形の形が「老ゆ」のためヤ行だとわかる。下に助詞「て」があることから連用形と判断する。

③ ナ行変格活用未然形 : ナ行変格活用の動詞は「死ぬ」と「住ぬ」の2語。下の「ぬ」は体言「こと」の上にあることから打消の助動詞「ず」と判断できる。そのため未然形だとわかる。

④ ハ行四段活用已然形 : 打消しの語をつけた時に「言はず」となることから、四段活用。下に「ど」があるため已然形。

⑤ ヤ行下二段活用連用形 : 終止形の形が「覚ゆ」のためヤ行だとわかる。下の「けり」は過去の助動詞で連用形だと判断できる。

問三 長野県

問四 男の妻が「おばはひねくれていて意地が悪いと」言い聞かせていたから。

： 傍線部②「おろかなること多く、このをばのためになりゆきけり」を訳すと、「おろそかにおばを扱うことが多くなつていた。」となる。傍線部②の前に理由を表す、過去の助動詞「けり」の已然形+接続助詞「ば」があるため、その直前が答えになる。

問五 一晩中、眠ることもできず、悲しく思われたので、このように詠んだ

：